

令和 6 年度

道 徳

会報 No. 20

**夢に向かって
自分らしく
生きる子どもたち**

名古屋市道徳研究会

は じ め に

「ナゴヤ学びのコンパス」に“大切にしたい子ども観”として、次のような文があります。

全ての子どもは生まれながらにして有能な学び手であるということです。
子どもは学ぼうとしているし、学ぶ力をもっています。全ての子どもは、適切な人や環境と出合うことで、自ら進んで環境に関わり、その相互作用の中で自ら学びを進め、深めていく存在なのです。そのように理解したうえで、子どもの学びに伴走することが大切なのです。

この子ども観は、これまで名古屋市道徳研究会が大切にしてきた子ども観と同じです。

「子どもは分かっていないから、教えてやろう」と、道徳的価値を教え込むような道徳の授業をこれまで否定してきました。

求めてきたのは、子どもの中に“ないもの”を教えるのではなく、“あるもの”に気付かせる授業です。

子どもたち自身が考えたくなり、意見を言いたくなる授業です。

他の教科ではあきらめて下を向いている子どもが、前を向いて、みんなの意見に耳を傾ける授業です。

教師が期待する答えを子どもが探す授業ではなく、みんなの意見を聞いた子どもが自分自身と対話し、その中で生まれた考えを表現する授業です。

教師が想像できなかったユニークな子どもの意見に、クラス全体が感心する授業です。

そして、教師は子どもと一緒に考え、時には子どもたちから教えられ、子どもとともに成長する、道徳の授業とはそうあるべきです。

名古屋市道徳研究会は、そのような「道徳授業の魅力」にとりつかれた、熱い思いをもった教員の集まりです。月に1度程度、数十人の研究部員が教育館に集まり、議論を深め、力量を向上させています。そして、部員の授業力はそれぞれのクラスで発揮され、子どもたちの「笑顔と学び」につながっています。

今年度は、子どもの実態に基づいた発問を軸として授業展開を考える「授業づくり研究部会」と、子どもが夢中になって考える授業にするためにどのような指導方法が効果的か考える「テーマ研究部会」に分かれて研究を進めてきました。その研究の成果をまとめたものがこの会報です。部員が自分の学校で実際に実践した授業展開例を多数載せています。この会報が、みなさんの授業実践に役立てられれば、こんなにうれしいことはありません。

本研究会の研究推進と会報の刊行に際し、ご指導、ご協力をいただきました皆様方に心より感謝申し上げます。

令和7年1月

名古屋市道徳研究会顧問
名古屋市立大高中学校長
服 部 豊

目 次

は じ め に

令和 6 年度 名古屋市道徳研究会 全体テーマ …… P. 1

授業づくり研究部会 …… P. 2

合同学習会 …… P.13

テーマ研究部会 …… P.16

本年度のあゆみ …… P.25

あ と が き

I 全体テーマ

夢に向かって自分らしく生きる子どもたち

II テーマの主旨

日々の生活の中で、子どもたちは明るい笑顔を見せます。また、子どもたちが夢に向かって、目を輝かせながらひたむきに努力する姿に、私たちは人間としての美しさを感じます。

このような夢に向かって自分らしく生きる子どもたちの姿は、未来への希望そのものです。そして、教師や保護者、地域の人々は、このような子どもたちの姿にふれ、明日への活力をもらうこともあるはずです。私たちは、子どもたち一人一人が笑顔を絶やすことなく、夢に向かって日々歩み続けてほしいと願っています。

さて、「特別の教科 道徳」（以降「道徳科」）は、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標としています。道徳教育の要となる道徳科の授業は全ての子どもが、仲間とともに学び合う中でこれからの生き方を思い描く時間です。ナゴヤ学びのコンパスで示されたように、道徳科の授業においても、全ての子どもたちが自分らしく、幸せに生きていくために「子ども中心の学び」が大切だと考えます。私たちは、「子ども一人一人の思いや願いを尊重する」「子どもと対話する」「子どもの自分なりのチャレンジを大事にする」この三つの視点を大切にしながら、よりよい生き方を探究できるよう、子どもたちの学びに伴走していくことが求められます。昨年度の研究では、子どもの実態に応じた授業実践や子どもの問題意識に焦点を当てた授業実践を重ね、子どもたちが自分との関わりで考え、主体的に議論する姿が多く見られました。これからは、子どもに委ねる場面を多く設定するとともに、これまでの研究を見つめ直し、さらに研究を深めることが必要です。自律して学ぶことができる環境設定、子どもたちの理解度や困り感に対する適切な支援、学びたくなる導入の設定等を充実させるなど、「子ども中心の学び」を実現するために責任をもって行うことがあると考えます。

私たちは、道徳科の授業を全ての子どもたちにとって、自分の生き方について考えることができる時間にするため、子どもたちの「考えたい」という思いに寄り添う研究を進めていくことが必要であると考えました。今年度は子どもが自分との関わりで考える授業づくりを目指した「授業づくり研究部会」と、子どもが夢中になって学ぶ授業の組み立てを考える「テーマ研究部会」の二つの部会に分かれてそれぞれ研究に取り組みます。

今年度も、私たち名古屋市道徳研究会は、道徳教育を通して一人一人の子どもたちが目を輝かせ、人としてよりよく生きていこうと考える姿を「夢に向かって自分らしく生きる姿」と捉え、実践を積み重ねていきたいと考えています。

自分との関わりで考える道徳科の授業

— 子どもの実態に基づいた発問を通して —

I 「自分との関わりで考える」ことがなぜ大切なのでしょうか

道徳科の授業は、今までの自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、これからの自己の生き方についての考えを深める時間です。そのため、授業で扱う道徳的価値について表面的に理解したり、教材に登場する人物の心情理解にとどまったりする授業では、十分な学習をしたとは言えません。授業で扱う道徳的価値を、子どもたち自身の経験と関連づけて考えられるようにすることで、子どもたちは授業の内容を自分との関わりの中で捉え、心を動かして考えることができるようになります。その過程では、子どもたちの今の実態に基づいた発問を投げ掛けることで、実生活に結び付きやすくなり、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自分との関わりの中で考えることができる子どもたちを育てていくことが期待できます。

II 授業づくり研究部会のあゆみ

昨年度は「自分との関わりで考える道徳科の授業—子どもの実態に応じた発問や終末の工夫—」をテーマとして、研究を行いました。部員一人一人が自分の学級の子どもの実態を把握し、子どもの実態を部員全員で共有した上で模擬授業を行い、発問や終末の工夫が本時のねらいを達成するために有効であるかを検証してきました。部員が子どもの実態、教材の捉え方について、基本から身に付けたり、子どもの実態に応じた発問を投げ掛け、子どもたちが自己の生き方について考えたりすることができたことは大きな成果でありました。しかし、子どもの実態把握だけにとどまることもあり「子どもたちが授業で扱う道徳的価値に対してどのように考えているか」や「本時の教材で子どもたちはどのようなことを学べるか」といった道徳科で育てたい資質、能力まで十分に達したとは言えませんでした。

その中で、「改めて、道徳的価値のよさを様々な角度から見直したい」「教材と向き合う時間や向き合い方について継続して学んでいきたい」という声も部員から上がりました。これらの課題や意見を基に、子どもの実態に基づいて、道徳的価値や教材のよさを大切にした授業づくりを学んでいく必要があると考えました。

III 子どもの実態に基づいた発問をするための「子ども観」

今年度は子ども観を大切にした授業づくりをしています。子ども観とは、①これまでの学習状況 ②日常の子どもの実態 ③教材の特徴 を合わせたものと捉えてきました。本部会では、授業者が子どもの学習状況や日常の実態を記したワークシートを持ち寄りました。また、それらと教材の特徴との関連を意識しながら子ども観をまとめ、より子どもの実態に基づいた発問を考え、子どもたちが自分との関わりの中で考えることができる授業を検討してきました。

Ⅳ 子ども観の把握方法と授業づくり

本部会では、授業を計画していく上で、以下のような手順で子ども観を検討し、その実態に基づいた発問を班に分かれて考え、研究を進めてきました。

授業づくりの流れ

1 主題とする道徳的価値の捉え方

道徳的価値は、よりよく生きるために大切であるとともに、実現が難しかったり、人によって考え方や感じ方が違ったりするものです。

授業づくりの始めに、扱う道徳的価値に対して様々な見方をする必要がありと考え、道徳的価値について五つの側面から捉えてきました。

【自分】

- ・心が温まる
- ・友達が増える
- ・人間関係が広がる

【相手】

- ・うれしくなる
- ・困難から脱却できる
- ・安心感がある

【学級・社会】

- ・集団がまとまる
- ・平和な社会
- ・争いがなくなる
- ・信頼関係が強くなる

【なぜ難しいか】

- ・自分を優先する
- ・周りが気になる
- ・恥ずかしいと思う
- ・勇気がない

【必要な考え】

- ・相手を大切に
- ・勇気をもつ
- ・自分から声を掛ける
- ・相手を考える

※1 【道徳的価値「親切、思いやり」を五つの側面から出し合った内容】

2 子どもたちの実態把握

子どもたちの実態を把握するためには、子どもたちが本時で扱う道徳的価値についてどのように考えているかを把握する必要があります。把握方法として挙げられたものがアンケートでした。内容は、子どもがエピソードを記述するものが挙げられました。項目は、上記1に基づいた質問や子ども自身が経験を振り返ることができるような、エピソードを記述する形式のアンケートを中心に行うことにしました。

【アンケートの質問例】

- ・思いをもっている、友達と自分の考え方が違ったとき、自分が一歩引いてしまうことがありますか。
- ・友達と自分の考え方が違ったとき、自分が一歩引いてしまい、モヤモヤが残ったことがありますか。(どのような場面か答えられる人は答えましょう)

3 教材の特徴の把握と発問

把握した道徳的価値の側面や子どもたちの実態との関連を意識して、扱う教材を通して、どんなことが学べるのか発問を踏まえた上で考えました。

【子ども観に対する教師の思い】

道徳科の授業に興味をもってほしい！

教材の内容を、自分との関わりの中で考えてほしい！

登場人物のよさに注目できるようになってほしい！

今の考えをアップデートできるようにしてほしい！

これからの自分に生かせるようになってほしい！

【子ども観に合った発問の例】

- ・〇〇と聞いて、どんなことを考えますか。
- ・〇〇について思い浮かぶ話はありますか。

- ・主人公の行動について、どう思いますか。
- ・主人公と似た経験をしたことがありますか。

- ・主人公のよいところは、どこですか。
- ・主人公の魅力は、どんなところですか。

- ・立場を変えたら、どんなことを考えますか。
- ・どんな場面でも同じことが言えますか。

- ・〇〇をするときに大切な気持ちは何ですか。
- ・今日、一番大切だと思ったことは何ですか。

V 授業の様子

実践例①

主題名

広い心で理解し合う

小学6年生

B 相互理解、寛容

【教材名】昼休みのコートで（出典：きみがいちばんひかるとき 小学6年 光村図書）

【教材の概要】

洋と光太は同じコートで、別々にバスケットボールをしている。洋は真剣に取り組む光太の様子が気になる。

夜になり洋は、光太がなぜあんな真剣にシュート練習に取り組んでいたかが気になる。その後、光太に理由を聞きに行く。

洋が理由を聞きに行くと、光太は真剣にシュート練習に取り組んだ理由を話してくれ、互いにすっきりした気持ちで再び練習に取り組む。

【「相互理解、寛容」がもつ五つの側面】

【自分】

- ・心が温まる
- ・友達が増える
- ・人間関係が広がる

【相手】

- ・うれしくなる
- ・困難から脱却できる
- ・安心感がある

【学級・社会】

- ・集団がまとまる
- ・平和な社会
- ・争いがなくなる
- ・信頼関係が強くなる

【なぜ難しいか】

- ・自分を優先する
- ・周りが気になる
- ・恥ずかしいと思ってしまう
- ・勇気がない

【必要な考え】

- ・相手を大切に
- ・勇気をもつ
- ・自分から声を掛ける
- ・相手を考える

【教材「昼休みのコートで」の特徴】

本教材は、互いに尊重し合ってよりよい関係を築こうとすることの大切さを学ぶことができる教材である。コートの使用をめぐる場面からは、互いに理解し合う難しさを感じ取ることができる。後半では、洋は光太にいつも一人で練習している理由を聞こうと歩み寄る姿が見られる。その姿からは、相手と分かり合うためには、自分から相手に一歩歩み寄り、真意を聞いてみようとするものの大切さを学ぶことができる。

【対象とする子どもの様子】これまでの学習で、相手と分かり合おうとすることが大切であると知っている。しかし、実際は、自分の考えをもっていても、相手との考え方の違いを意識するあまり、分かり合おうとすることができていない子どもが多い。その理由としては、「自分の意見を言うと口論になりそうだから」「自分と友達の意見が違ったので、自信がなくなったから」といったものが多かった。本時を通して、相手と考えが違うときに一歩歩み寄ろうとする態度を育てていきたい。

【本時のねらい】

一人でコートを使う光太にその理由を聞きに行く洋の姿を通して、相手と理解し合うために行動することの難しさを捉えながらも、そのために大切な気持ちは何かを考えることで、相手の立場に立って考え、互いに尊重し合ってよりよい関係を築こうとする態度を育てる。

【子ども観に対する教師の願いと発問】

課題意識をもって道徳科の授業に参加してほしい！

友達と考えが違っていたとき、自分が一歩引いてしまうことはありますか。（アンケートにて）

友達と分かり合おうとする思いをもってほしい！

洋のすごいところはどのようなところでしょう。

教材の内容を自分との関わりの中で考えてほしい！

洋は、どのような思いで、一人で練習している理由を聞きに行ったのでしょうか。

相手の立場で物事を考えられるようになってほしい！

相手と理解し合うためには、どのような気持ちや考えが大切なのでしょう。

【授業の流れ】(C…児童、T…教師)

導入

○ アンケート結果から、相互理解について実態を捉える。

T：友達と考えが違ったとき、自分が一歩引いてしまうことはありますか？

アンケート結果だと、半分ずつの結果でした。本当に一歩引いてしまうことってないのかな？

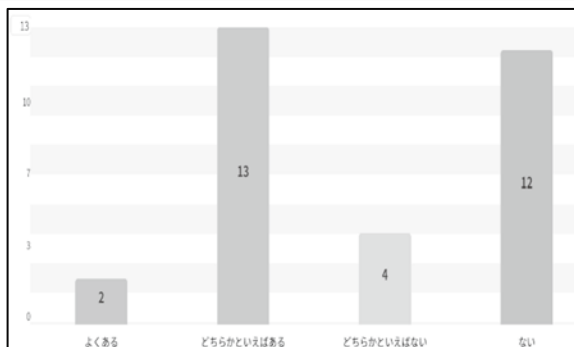
C：いや、ちょっとあるかもしれない。

T：なぜ、一歩引いてしまうのかな？

C：相手を思っているからこそ、引いてしまう。

C：自分の意見に自信がないから。

C：気を遣ってしまう。



〈考察〉 アンケート結果を提示し、その理由を考えることで、相手を理解しようと思っていても、一歩引いてしまうことがあるという実態を自覚できるようにすることができました。

T：(挿絵を見せながら)この絵から何か感じることはありますか？

C：仲間外れではなく、あえて一人でやっているのではないかな？

T：仲間外れでは？と思った人はいませんか？

C：(数人が挙手する)

C：気を遣って一人でやっているのではないかな？

T：今日のお話はこの光景で始まって、最後も同じ光景で終わります。



展開

○ 教材を読んだ後、洋について考える。

C：光太のことを夜まで考えていたころ。

C：光太から話を聞いた後に「話してくれてありがとう」と言えたところ。

C：光太に事情を聞きに行ったところ。

T：洋のすごいところはどこでしょう。

T：みんなにも同じことができそうですか。

C：考えられる。結構考えられるかも。



〈考察〉 洋のすごいところが自分にもあるのか、自分にもできそうなことを考えられるようにしたことで、相手と理解し合おうとすることの難しさやその素晴らしさに気付くようにすることができました。

T:「そっちがじゃまだよ」と光太に言われたあと、なぜ洋は光太と口を聞かなかったのでしょうか。

C: 気まずかったから。

C: 光太にうっとうしいと思われたと思ったから。

C: その時何か言い返すといざこざが生まれて、もっと関係が悪くなりそうだったから。

T: 友達に思っていることを伝えたり聞こうとしたりしたら、けんかやトラブルになるからやめておこうっていう気持ちは分かりますか？どのくらい分かりますか？（1～5段階）

C: 挙手（4、5が多数）



〈考察〉 なぜこの瞬間には聞きに行けなかったのかを考えられるようにすることで、洋の心の葛藤やトラブルを避けるために一歩引いてしまう心の弱さなど、本学級の子どもの実態に合った考えを引き出すことができました。

☆中心発問☆

T: 洋はどのような思いで、一人で練習している理由を聞きに行ったのだろう。

C: 理由を知らないまま「じゃま」と言ってしまった。このままだともっともめることになると思った。

C: 互いに「じゃま」と言い合い、微妙になってしまった関係を修復したいと思った。

C: 光太にも何か理由があるかもしれないと思った。

C: 光太の真剣な表情が心に残っていて、もやもやしていたんじゃない？

～問い返し～

T: もやもやするから理由を聞きに行くということは、自分のために聞きに行ったのかな？

C: 相手（光太）のためにも聞きに行っていると思う。T: では、光太のすごいところは？

C: 言いづらかったことをすぐに話したところ。 C: 光太も洋に歩み寄っていた。

〈考察〉 洋の葛藤を捉えた上で、光太に理由を聞きに行った思いを考えるようにすることで、良好な関係を築くために、相手の立場に立って理解し合おうとすることが大切だということを感じられるようにすることができました。

○ 相互理解について考えを深める。

T：昨日までと変わらないこの光景（P101 場面絵）ですが、何が変わったのでしょうか。

C：一人一人の気持ちが違うと思う。

T：どんな気持ちの違いですか？

C：はじめは「じゃまだな」という気持ちがあったけど、最後は互いに思う気持ちがある。

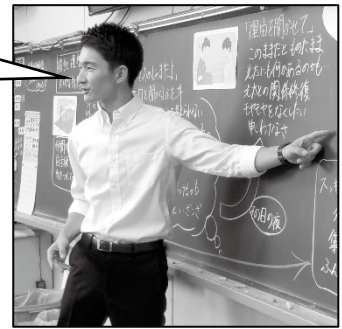
C：声を掛けるまでは、トラブルを避けようとか、一人で寂しくないかな？とか思っていたけど、理由を聞いて互いにすっきりした気持ちでバスケットボールができていと思う。

T：コート雰囲気はどうですか？

C：左（初めの光景）の方がいい。

T：みんなはどちらのコートでバスケットボールがしたい？

C：左（初めの光景）の方。集中してプレーできそう。



〈考察〉 光景が変わらないコートにいる登場人物の内面の変化に注目できるようにすることで、相手と理解し合って生活しようと気持ちや態度が、よりよい人間関係を作っていくために大切であることを理解できるようにすることができました。

終 末

○ 相手を理解するためには、どのようなことが大切なのかを考える。

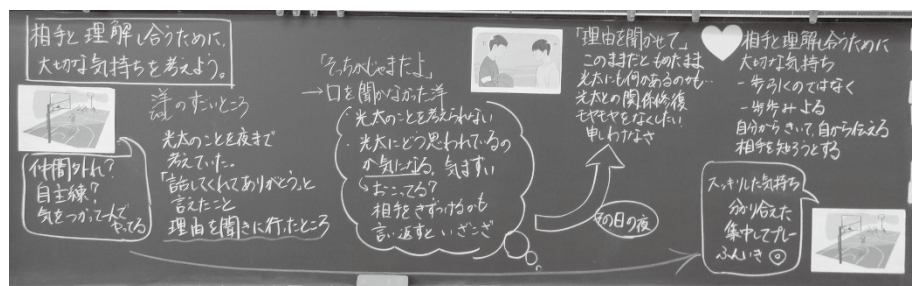
T：相手と理解し合うためには、どのような気持ちや考えが大切なのでしょう。

C：一歩引くのではなく、相手に一歩歩み寄って気持ちを伝えようとするのが大切。

C：まずは、自分から相手に理由や思いを聞いてみようとする気持ち。

C：自分のことを相手にきちんと伝えようとするのも大切だと思う。

C：相手の気持ちが分からず関係が悪くなってしまったときは、話してみるしか解決できないから、相手の思いを知ろうとすることが大切だと思った。



公開授業の成果と課題(○：成果、●：課題)

- アンケート結果の提示により、友達とのトラブルを避けるために一歩引いてしまうことがあるという実態を子ども自身が捉えられるようにすることができました。
- 洋の葛藤と、理由を聞きに行った思いを考えることで、相手と理解し合うためには、「一歩引くのではなく、歩み寄ることが大切」という、トラブルを避けるために自分が一歩引いて、本音で思いを伝え合えないという本学級の実態に合った発言をする姿が見られました。
- 実態を把握し、発問を吟味したことで、教師が予想できる発言が多く、スムーズに授業が流れた一方、子どもが即答できる発問が多かったことから、相互理解についてじっくりと考えられる発問の吟味と発言をしていない子どもの考えも取り上げる必要性を感じました。

実践例②
主題名

すごしやすいクラスに

小学2年生
C よりよい学校生活、
集団生活の充実

【教材名】 クラスの大へんしん（出典：きみがいちばんひかるとき 小学2年 光村図書）

【教材の概要】

ある学級の様子を描いた2枚の場面絵がある。2枚の状況は大きく異なっている。

1枚目は児童の自分勝手な行動や乱雑な教室の様子を描かれている。

2枚目は周りの人のことを考えた行動をする児童や、整頓された教室の様子が描かれている。

【「よりよい学校生活・集団生活の充実」がもつ五つの側面】

【自分】

- ・心地よさ
- ・寛容
- ・所属感
- ・集団への愛着
- ・主体性
- ・協調性

【相手】

- ・心地さ
- ・安心感
- ・信用
- ・仲間意識
- ・集団への愛着
- ・よい集団づくりの連鎖

【学級・社会】

- ・一体感
- ・所属感
- ・主体性
- ・居心地のよさ
- ・優しい集団

【なぜ難しいか】

- ・自分のことを優先
- ・自分だけ損
- ・他者目線の欠如
- ・心地良さのズレ
- ・事なかれ思考

【必要な考え】

- ・思いやり
- ・集団への意識
- ・行動を起こす勇氣
- ・奉仕の精神
- ・所属感

【教材「クラスの大へんしん」の特徴】

本教材は「C よりよい学校生活、集団生活の充実」をねらいとしているが「B 友情、信頼」の内容も含まれている。そのため「友情、信頼」を「よりよい学校生活、集団生活の充実」を多面的・多角的に考えさせる際の参考として扱うことを意識することで、価値の理解を広げることができる。

【対象とする児童の様子】

自分の学級をよりよくしたいという思いはもっているが、自己中心的な考えをし、学級のことでより自分のことを優先してしまう姿がよく見られる。このことは、よりよい学級を作るために行動するよさをまだ実感できていないことが原因だと考えられる。

【本時のねらい】

「クラスの大へんしん」の舞台となる学級が変容する場面を通して、よりよい学級にするための行動は、自分や周りが気持ちよく過ごすことにつながることに気づき、自分たちの学級をみんなで過ごしやすいようにしようとする実践意欲を育てる。

【子ども観に対する発問の例】

自分の学級をよくしたいという気持ちを大切にしてほしい！

これでいいのかなと思うところは、どこですか。

学級のための行動は周りの人がどのように感じるかを知ってほしい！

いいなと思うところはどこですか。

学級のための行動をした自分がどのような気持ちになるかを知ってほしい！

過ごしやすいクラスにするためには、どのような心が大切なのでしょう。

<授業の流れ>

導入

- 導入のプレゼンテーションを見せる。

展開

- よりよい学校生活について考える。

T：これでいいのかなと思うところは、どこですか。

C：本を取って走り回っているところ。

T：どうしてそう思ったの？

C：本を取られた人が嫌な気持ちになっていそうだし、見ているのも嫌な気持ちになりそうだから。

T：いいなと思うところはどこですか。

C：本や道具がきれいになっているところ。

T：どうしてそう思ったの？

C：ものがきれいにそろっていると、みんなが気持ちよくなると思ったから。

T：過ごしやすい学級にするためには、どのような心が大切なのでしょう。

C：周りのみんなのことを考える心。

T：自分の考えと近いですか。違いますか。

C：近いです。みんなのことを考えると、みんなに優しくできると思います。

C：近いけど、ちょっと違います。みんなのことを考えるというか、みんなに優しくする心が大切だと思います。

T：みんなに優しくする心で、気持ちよくなるのは誰ですか。

C：優しくされた人。

C：見ていた人もいい気持ちになる。

C：優しくした本人も気持ちよくなると思う。

終末

- 学びを確認する。

C：みんなのことを考える気持ちを大切にしてい、みんなにとっていい学級にしたい。

☆ 教材への興味を高める導入の工夫

導入でいきなり教科書を開くのではなく、挿絵の一部のみを見せます。「何か気付いたことはありますか」と尋ねることで、「落書きしてる！」や「いじわっている！」といった声が上がりました。



【提示した資料】

その後、「実は、これは学級の一部です。この学級には、まだよくないところがあるかもしれません」と言うと、子どもたちは自然と教科書を開きました。このように、挿絵の見せ方を工夫することで、教材への興味を高める導入を行うことができます。また、その後の発問への反応がよくなる効果も期待できます。

☆ 子どもの発言を基に議論を生む工夫

子どもの発言を生かした問い返しをして再度子どもに聞くことで、議論を生むことができました。友達の見解に対する考えを次のような記号で表出させました。

◎…なるほど！大賛成！

○…確かにそういう考えもあるな。

□…自分とは違う考え方でおもしろい。

意見をもったり書いたりすることが苦手な子どもも話し合いに参加しやすくなりました。また、友達の見解を一生懸命に聞こうという気持ちをもつことにもつながりました。

他にも、子どもの意見を基にみんなで考えたい話題を広げたり、付け足しをするように促すことで、考えを深めたりすることもできました。

【これから実践する先生方へポイント】

授業を通して考えたことを思い出す機会があると、より心の成長につながります。例えば、授業中の子どもの発言や教師からの発問、挿絵を掲示することで、授業が終わった後も子どもたちが考え続けることができます。授業中はもちろん、日常でも考え続けることができると道徳の授業が楽しいと思える子どもが増えると思います。

【教材名】 なおとからのしつもん（出典：きみがいちばんひかるとき 小学3年 光村図書）

【教材の概要】

「ぼく」は最近、なおとの態度が気になっている。

「ぼく」はいけないと思い、「なおと」に「人によって態度を変えることはだめだ」と注意した。

「なんで人によって態度を変えることがだめなの？」となおとに質問されて「ぼく」は困る。

【「公正、公平、社会正義」がもつ五つの側面】

【自分】

- ・様々な見方、考え方
- ・許す心
- ・前向きで明るい気持ち

【相手】

- ・仲間意識の高まり
- ・自己肯定感の高まり
- ・安心感

【学級・社会】

- ・不平等感が生まれない
- ・前向きな発想
- ・活発
- ・自分の居場所、安心感

【なぜ難しいか】

- ・自己中心的な考え
- ・自分の仲間を優先
- ・自分よりも弱い存在に対して、優越感をもつ

【必要な考え】

- ・相手を知ろうとする
- ・思いやり
- ・偏った見方や考え方を許さない

【教材「なおとからのしつもん」の特徴】

本教材は、誰にでも同じように接することのよさに気づき、公正・公平に接することの大切さを学ぶ教材である。登場人物のなおとは、席替えや休み時間の場面で人によって態度を変えてしまう。なおとの人によって態度を変える行動や質問を通して、公平に接することの大切さに気付くことができる教材である。

【対象とする児童の様子】

中学年になると、分け隔てなく公平に接することの大切さを理解できるようになるが、それは知識としての理解であることが多い。日常生活に目を向けると、自分の好きな相手には仲良く接しようとするが、苦手な相手や自分が不利益を被った相手に対しては、避けたり嫌な態度をとったりすることがある。

【本時のねらい】

人によって態度を変える「なおと」の姿を通して、相手が嫌な思いをする行動について考え、誰にでも同じように接することのよさに気づき、公正、公平に接しようとする判断力を育てる。

【子ども観に対する教師の願いと発問の例】

本時で学ぶねらいに興味やわくわく感をもってほしい！

考えてほしい場面のクイズをするので、よいかよくないか考えましょう。

違う立場から自分の考えをさらに深めてほしい！

登場人物の思いが分かりましたが、その場面を見たあなたはどのように感じますか。

これからの自分に生かせるようになってほしい！

なおとの質問に対してなおとに寄り添いながらどのように答えるのか手紙を書きましょう。

<授業の流れ>

導入

○ 「公平」とはどういうことか考える。

T: みんなに考えてほしい場面を見せます。
その場面を見て、よいかよくないかクイズ
をします。

C: みんなが見えるようになった。

C: 背が低い人のことを考えているね

展開

○ 登場人物たちの気持ちを考える。

T: それぞれの場面でじゅんやとひろし、
ほなみとゆかこは、どんな気持ちだった
でしょう。

C: じゅんやは、友達が喜んでくれているから
うれしいと思っている。

C: ひろしは、なんでぼくを受け入れてくれな
いの。寂しいなと思っている。

C: ほなみは、うれしい。一緒に遊んでくれて
優しいねと思っている。

C: ゆかこは、どうして私は仲間外れにするの
と悲しいと思う。

T: 4人の気持ちに気付きましたね。では
その場面を見たあなたは、どう感じます
か。

C: 態度を変えるなんてよくないな。

C: なおとと関わりたくないな。

C: 友達と協力して、よくないと教えてあげた
いな。

C: 自分が態度を変えられたら悲しいから友達
になりたくないな。

C: みんなと仲よくした方が楽しいのに、優し
くないな。

T: 公平に接する大切さや、難しさがわかり
ましたね。なおとの質問に対してなおとに
寄り添いながらどのように答えるのか手紙
を書きましょう。

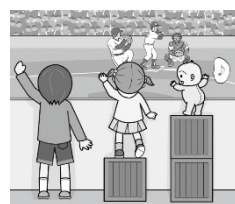
終末

○ 学びを確認する。

☆ 導入の工夫

パワーポイントで公平、不公
平な場面を見せながら、クイズ
形式で公平とは、どのようなこ
となのか発表しました。

児童は、導入で本時の学習に
意識を向かせることができました。

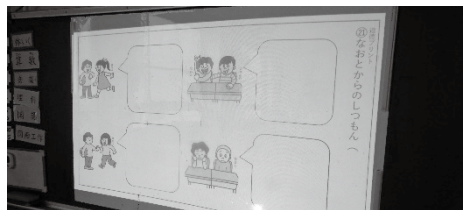


【提示した場面の一部】

☆ 場面を比較し考えを広げる工夫

子どもが考えやすい場面から取り組めるよう
に、その時の登場人物の気持ちを吹き出しに書く
ことができるように声を掛けました。

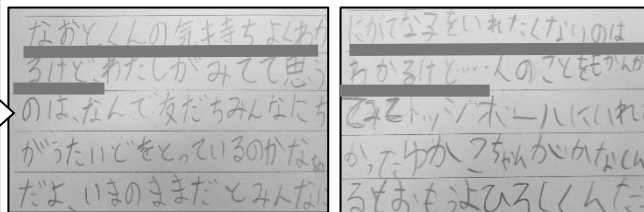
子どもは、自分の経験を振り返りながら書きやす
いところから書くことができました。また、登場人
物の気持ちを比較することで、なおとの行動は良く
ないことだと意識することができました。経験を振
り返る中で、公平に接することの難しさにも気付く
ことができました。



【上下で比較できるようにしたプリント】

☆ I(アイ)レター

なおとの質問に対して、本時の学びを生かしな
がら手紙を書きました。子どもはなおとに「人によ
って態度を変えてはいけない」と、書くだけでな
く、難しさに寄り添いながらいけないことを手紙
で書くことができました。



【児童が記入した手紙】

【これから実践する先生方へポイント】

いじめは、大きな社会問題です。いじめの防止という視点から公正、公平、社会正義という内容項目が追加されました。子どもたちは、「いじめはだめなこと」と知っています。しかし、友達の気持ちをよく考えず、軽はずみな言動で友達を傷つけることもあります。集団としての意識が強くなるこの時期に、いじめはなぜ起きるのか、いじめをなくすために何が大事か、いじめの原因やその背景について考えていくことが重要です。

Ⅵ 授業づくり研究部会のまとめ

1 成果と課題

本部会では「自分との関わりで考える道徳科の授業—子どもの実態に基づいた発問を通して—」をテーマに研究を進めてきた結果、次のような成果と課題が明らかになりました。

【成果（○）】

- 本時で主題とする道徳的価値を五つの側面から捉えた結果、その道徳的価値のよさだけではなく、実現の難しさについても考えることができ、様々な子どもの実態に基づく発問を考えることができました。
- 模擬授業形式の検討会では、授業者が児童の実態を伝えた上で部員は子ども役になりきりました。部員は、子どもの視点に立ち、発問が自分との関わりで考えられるかどうか、ポイントを絞って授業の検討を進めることができました。

【課題（●）と改善点（→）】

- 子どもの実態を把握するために取ったアンケートの内容が、自分の経験を振り返りやすいものであったかを、今後も十分に検討を重ねていく必要があると思いました。
- 子どもたちが自分の経験を振り返りやすいアンケートを作るために、子どもたちの生活を十分に観察した上で考えた項目だけでなく、数値による質問項目を増やし、信憑性を高めていく必要がありました。
- 授業をつくる段階で、多くの発問を考えたが、中には子どもたちが教材の内容をなぞるだけの発問もあり、「子どもに高めてほしい心情」と「子どもの実態」と「発問」が連携していないときがありました。
- 道徳科における、発問がもつ様々な役割について学んだり、発問を考える際には常に「子どもの実態」と「高めてほしい心情」を意識したりして、より子どもの実態に基づいた授業展開を考えていく必要がありました。

<部員の声から>

授業で扱う道徳的価値には、様々な見方があるということを学びました。子どもの実態をイメージしながら、発問の言葉一つ一つまで精選していった経験は、明日からの授業準備に大いに役立ちました。



子どもの実態をイメージして、なりきって、よりよい発問や授業の工夫を考えていく時間がとても有意義に感じました。多くの先生方から日頃の実践についての話を聞けたこともよかったです。

2 今後の方向性

本年度は、「自分との関わりで考える道徳科の授業—子どもの実態に基づいた発問—」をテーマに、道徳科における、子どもの実態により応じた授業づくりについての研究を進めてきました。次年度は、子どもの実態に基づいた発問を考えていく上で、子どもたちが多様な考えを認め、自分の生き方に生かしていけるような授業づくりを、部員一同で学んでいきたいと思っています。

令和6年度 合同学習会

「合同学習会」とは、授業づくり研究部会とテーマ研究部会の両部会が集まって道徳科について学習する会です。本年度は、各回の担当の部員が模擬授業を行い、それをもとにして道徳科の指導方法について学習を行っていました。模擬授業というライブ感の中で、道徳科の授業について楽しく勉強できました。

第1回（5／15）

自己の生き方について考えを深める工夫をした道徳科の授業

道徳科の学習指導要領解説には、「自己の生き方について考えを深める」学習活動の大切さが記されています。しかし、言うのは簡単ですが、実際にどのような学習活動を取り入れるとよいのかについては悩むかと思います。

そこで、昨年度研究員をされた二人の部員からの提案をもとに今年度最初の学習会が開かれました。道徳科で学んできたことを「自分マップ」として表現するという画期的な活動に、他の部員も夢中になって取り組んでいました。



自分マップを作成する部員

第2回（6／5）

「正直、誠実」の道徳科の授業

第2回からは、「内容項目」をテーマにして学習会が開かれました。

「みなさんの正直レベルはどれくらいですか。」と問い、その度合いを手を広げた大きさで表すことで、自己を振り返らせるだけでなく、授業に対する興味関心をもたせる導入のアイデアの紹介がありました。

また、発問に対して活発な意見の交流があり、各部員の熱量の高さを改めて感じました。

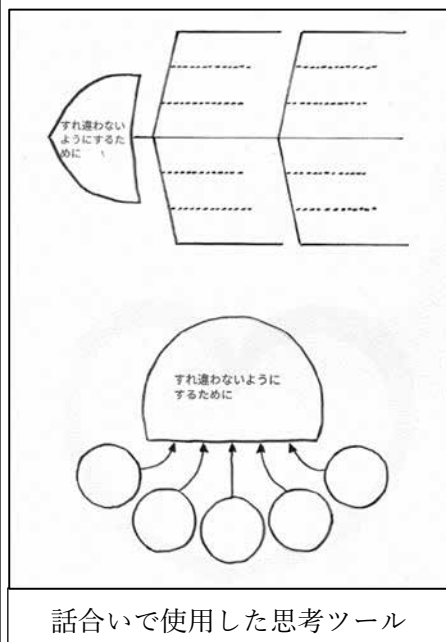
正直、誠実であることは大切であると知っていても、人間は時として正直に行動しようかどうか迷ってしまうこともあります。そのような弱さの一面があることも大切であると改めて認識できた時間となりました。

第3回（7／4）

「相互理解、寛容」の道徳科の授業

第3回の学習会では、模擬授業の後に授業者から、なぜこのような授業の組み立てにしたのかについての解説がありました。ただ、模擬授業を受けるだけでなく、指導者の意図を知ることは、日頃の道徳科の授業づくりの参考になりました。

「フィッシュボーン」や、「クラゲチャート」などの多様な思考ツールを活用した話し合い活動を実際に体験することで、授業を受けている児童の気持ちを感じ取ることができました。部員からは「クラゲチャートがこんなに使いやすいとは思わなかった」という感想があり、新たな気付きのある学習会となりました。



第4回（9／4）

「規則の尊重」の道徳科の授業

第4回の学習会の見所は、ICT機器の活用でした。道徳科の授業で、どのようにICT機器を使っていくかというのは私たちの課題です。そこで、デジタル教科書を活用した教材提示や、ロイロノートを活用した話し合い活動の提案がありました。

ロイロノートでの話し合い活動においては、提出箱に自分の考えを書いたカードを提出してみんなで見合うという方法ではなく、実際に声に出して考えを伝えあった後に、カードを子ども同士が送り合うという新しい手立ての紹介がありました。

この活動は、「アナログ」の相手の目を見て話せるというよさと、「デジタル」のたくさんの人の考えが蓄積できるというよさを合わせたもので、誰もが次の日に試したいと思いました。



話し合い活動を行う部員の様子

第5回（9／25）

「生命の尊さ」を題材とした道徳科の授業

「命を大切にする」「自分たちは生きている」ということは日頃あまり考えることがなく、当たり前前に感じていることです。だからこそ、自分自身を振り返り、子どもに「生命の尊さ」を感じさせることができるような授業をどのようにつくるかについて、議論しました。

様々な背景をもつ子どもがいる学級の実態を教員が把握し、それぞれの学級に合った発問や手立てが必要であることを改めて実感しました。また、自分事として授業の内容を捉えることができるように、自分の身体が成長していく様子や、日頃の活動と授業をつなげるとよいという案も出て、実りのある勉強会となりました。



模擬授業の様子



実践の紹介を行う部員

今年度から参加された部員の声



子どもの実態に合わせて考えられた授業を受けられることが勉強になっています。その中で、授業の流れを説明するだけでなく、実際に子どもになりきることによって今まで気付かなかったことに気付くことができるのもいい経験であると感じています。

合同学習会担当者から一言

「道徳科の授業をどのようにつくるか悩んでいる」「いろいろなアイデアを知りたい！」そう思っているみなさん、ぜひ合同学習会に参加してください。みなさんの参加が、きっと部員の励みにもなります。たくさんの方と一緒に道徳科について学んでいきたいです！！



10月以降の合同学習会の内容

- | | |
|-------|-------------------|
| 11／1 | 「節度、節制」の道徳科の授業 |
| 12／11 | 「礼儀」の道徳科の授業 |
| 1／10 | 「勤労、公共の精神」の道徳科の授業 |

子どもが夢中になって考える道徳科の授業

— 7つの指導方法の工夫を組み合わせる —

I テーマ設定の理由

昨年度は「『なんでだろう？考えたい』と思える道徳科の授業」を主題として、子どもの問題意識に焦点を当てた研究を進めてきました。その中で、子どもの「考えたい」という思いを引き出し、活発な議論を生むための支援は成果を挙げることができました。しかし、授業のねらいに迫るための適切な支援については課題が残りました。

また今年度より、名古屋市では、学びの方針として出された「ナゴヤ学びのコンパス」を意識した学びが各学校で進められています。本研究会でも、これまで子どもが「自分に合ったペースや方法で学ぶ」ためや「多様な人と学び合う」ための発展的な手立てについて学んできました。しかし、その中で、今一度道徳科で用いられている基礎・基本の手立てについて見直すことも必要ではという声も部員から上がりました。「ナゴヤ学びのコンパス」では「夢中で探究する」姿も重視されており、道徳科の学習においても、子どもが夢中になって考えながら、授業のねらいに迫っていくことを大切にしたいと考えていました。

そこで、今年度は「子どもが夢中になって考える道徳科の授業」を主題として研究を進めていました。学習指導要領に書かれている「道徳科に生かす指導方法の工夫」のよさや生かし方について改めて確認し、複数の工夫を効果的に組み合わせることで、夢中になって考える子どもの姿を引き出す道徳科の授業を目指していきたいと考えました。

II 子どもが夢中になって考える道徳科の授業にするために



ずっと教師主導になってしまう。



子どもが授業に乗ってこない。

道徳科の授業をしている先生から、上のように悩んでいる声が聞かれることが少なくありません。子どもが道徳科の学習に最も主体的に取り組んでいる時とは、授業の中で夢中になって考えている時であると考えます。学習指導要領には、子どもが主体的に取り組むことができるように、7つの「道徳科に生かす指導方法の工夫」が紹介されています。7つとは、①教材提示②発問③話し合い④書く活動⑤表現活動⑥板書⑦説話のことです。これらの工夫は、それぞれ単独で授業に取り入れるだけでも有効に働きます。しかし、その中でも親和性があると考えられる工夫を組み合わせることで相乗効果を発揮し、さらに子どもの主体的な活動を促すことができると考えました。そこで、本部会では、それぞれの指導方法の工夫のもつよさについて改めて考え、吟味しながら組み合わせ、それらを生かした実践を行っていました。

Ⅲ 夢中になって考える子どもの姿とは

道徳科の学習の中で、夢中になって考える子どもの姿とは、どのような姿なのでしょう。各学校の実態や子どもの発達段階によって異なるところはあると思います。本部会では始めに、導入、展開、終末のそれぞれの授業段階における目指したい子どもの姿について話し合い、以下のように定義しました。



本部会で目指す夢中になって考える子どもの姿

	引き出したい子どもの姿
導入	「えー！」という驚きを感じる 「何でだろう」という疑問をもっている 「楽しそう」「考えてみたい」という期待感を抱いている
展開	多様な考えをもったり、じっくりと考えたりすることができる 話合いで話を広げ、自分の考えを積極的に伝えている 友達の考えを聞いて共感したり、新たな発見をしたりしている
終末	価値について自分との関わりで真剣に考えている 「楽しかった」や「もっと考えたい」と感じている

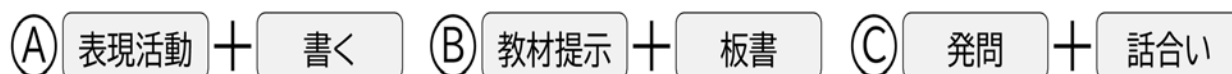
Ⅳ 7つの指導方法の工夫について

道徳科に生かす指導方法には多様なものがあります。授業のねらいを達成するためには、ねらい、子どもの実態、教材や学習の流れなどに応じて、最も適切な指導方法を選択し、生かしていくことが大切です。学習指導要領には、指導方法の工夫の例として、以下の7つが挙げられています。

※ 「学習指導要領解説・道徳編」（文部科学省）小学校編に基づいて部員が整理した表

7つの工夫	工夫の効果	工夫の着眼点・具体例の一部
① 教材提示	子どもの想像や共感をかき立て、問題意識をもたせる	・紙芝居 ・パネルシアター ・ICT機器の活用 ・実物や写真の提示
② 発問	子どもの多様な考えを引き出し、思考を深める	・問題意識を生む発問・切実感のある発問 ・自由な思考を促す発問
③ 話合い	子ども相互に多様な考えを学び合い、深め合い、切磋琢磨する	・ディベート形式・ペア、小グループ形式 ・心情図、グラフなどの活用
④ 書く活動	学習の個別化を図り、自分の考えを深められる	・手紙の形式 ・吹き出しを付けた形式 ・絵や記号等でかく形式
⑤ 表現活動	考えが内面から語られ、実感的に深められる	・役割演技 ・劇化 ・動作化 ・ロールプレイ
⑥ 板書	思考を深める共通のノートとして、自分の考えに生かす	・子どもが参画できる構成・対比的な構成 ・黒板を舞台のようにした構成
⑦ 説話	子どもの心情に働きかけ、子どもの思考をより深められる	・日常の話題 ・学級のできごと ・教師の体験 ・有名人の格言

部会では、7つの指導方法の工夫の効果や具体的な活用方法について改めて見直し、これらの工夫をどのように用いることで、目指す子どもの姿を引き出すことができるのかについて考えました。話合いの結果、7つの指導方法の工夫のうち、説話を除く6つを次のように組み合わせて活用することで、それぞれの工夫の効果をさらに高め、子どもが夢中になって考える道徳科の授業をつくることができると考えました。



そこで部会を3つのグループに分け、それぞれの工夫の組み合わせを生かした授業について考え、実践を行ってきました。次ページからは、各グループが取り組んできた「夢中になって考える道徳科の授業」の実践を紹介します。

VI 授業の様子

実践例①

主題名

だれにたいしても

小学2年生

C 公正、公平、社会正義

【教材名】 あめふり（出典：きみがいちばんひかるとき 小学2年 光村図書）

【ねらい】 仲のよい友達だけを傘の中に入れようとしたふみおの姿を通して、誰に対しても同じように接しようとする気持ちをもつことは、どうして大切なのかを考え、好き嫌いにとらわれず人に接しようとする実践意欲と態度を育てる。

【教材の概要】

学校から帰る途中、雨が降ってきた。大きな傘を持っていたふみおは雨が降ってきても平気だった。



傘を持っていないのりことひろみがやって来て、「入れて」と言われたが、「のりこちゃんだけなら…」とふみおが言った。



のりこに「えっ、わたしだけ。じゃ、いいわ。さようなら」と言われた。走っていく二人を見て、ふみおは、はっとした。

【本時で引き出したい夢中になって考える子どもの姿】

- 導入場面において、「人によって態度を変えるのって、嫌な感じがする」「どうして嫌な感じがするんだろう」と問題意識を高める姿。
- 展開場面において、反省や後悔をする主人公の心情を自分と関わらせながら考え、「次からはこんな風に人と接したい」とこれからの生き方について思いをもつ姿。

表現活動の工夫

- 導入場面で、傘に入れてあげる場面と傘に入れてあげない場面を演じて見せるようにします。めあてにつながる場면을視覚的に捉えられるようにすることで、本時に考えることについて焦点化できるようにします。
- 展開場面で、教材文には登場しない「主人公の行動を見ていた周りの友達」の役をつくり、はっとした主人公に対して、アドバイスをする友達を子どもが演じる活動を取り入れます。動きのある活動を行うことで低学年の子どもたちの意欲が持続するように、演じる子どもだけでなく、演技を見ている子どもたちの考えも広げることができるようになります。



書く活動の工夫

- 中心発問について、感情を表すハート型の吹き出し欄に自分の考えを書くようにすることで、心情面に目を向けて考えられるようにします。
- 主人公へのアドバイスを考える際には、せりふの吹き出し型の欄に書くようにすることで、登場人物の気持ちを自分と関わらせながら考えられるようにします。



気持ちを表す表情絵

導入

○ 人によって態度を変えるとよくない点について考える。

T：先生を見て、どう思いましたか。

C：いやな感じがする。

C：よくない。

C：差別している。

【めあて】人によってすることを変えないことの大切さを考えよう

展開

○ 公正・公平な態度で接することについて考える。

発問：「ふみおくん、入れて」と言われたとき、嫌な顔をしたのはどうしてでしょう。

C：ひろみさんとは仲よしじゃないから。

C：一人しか入れられないから。

発問：ふみおくんが、はっとしたとき何を考えていたでしょう。（中心発問）

C：入れてあげればよかったかな。

C：仲よくしたいな。

発問：はっとしたふみおくんにアドバイスをしよう。

C：嫌な気持ちにしないように。

C：いろんな友達と仲よくしよう。

終末

○ 自己を見つめ、好き嫌いにとらわれず人に接しようとするということについて考えを深める。

発問：今日の授業で気付いたことややってみようと思ったことを発表しよう。

C：友達じゃなくても、優しくする。

C：みんなの気持ちを考える。

表現活動の工夫①

Aさんはいいけど、Bさんはだめ。

えー、なんで？

教師

A役

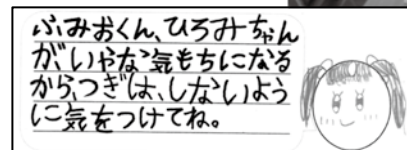
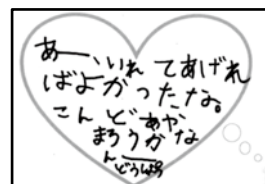
B役

C：かわいそうだよ！

めあてにつながる場面を教師が演じて見せ、状況を視覚的に捉えられるようにしました。

書く活動の工夫

発問に合った吹き出し型のワークシートを活用することで、気持ちやせりふを具体的に考えられるようにしました。



表現活動の工夫②

見ていた友達役

主人公役

友達じゃなくても、仲よくするといいいよ。

主人公に優しくアドバイスできるようにしたことで、価値の大切さに気付かせることができました。

【これから実践する先生方へポイント】

低学年の子どもは特に、自分が演じることで自分と関わらせながら考えをもつことができます。また、誰かが演じている状況を見て、演者の考えを想像することも大切な活動です。

吹き出しを活用して記述しやすくしたワークシートに考えを整理した上で、動作化などの表現活動の工夫を取り入れることで、価値について夢中になって考える子どもの姿を引き出すことができます。

【教材名】 三十八億年の命(出典：きみがいちばんひかるとき 小学5年 光村図書)

【ねらい】 すべての生命は38億年も前からつながっているという話を通して、生命は誰のものなのかを考え、つながりの中にある生命のかけがえのなさを自覚し、命を大切にして生きようとする心情を育てる。

【教材の概要】

生き物は、生き物からしか生まれない。同じ人は一人もおらず、みんなただ一つの存在である。



人や虫、植物の始まりを調べていくと、大昔に海の中で生まれた38億年前の細胞に行き着く。



命は、あなただけのものではない。長い間、命をつないできた生き物への感謝を忘れずにいよう。

【本時で引き出したい夢中になって考える子どもの姿】

- 導入場面において、「写真の生き物に共通するものは何だろう」「命はどのようにつながってきたのだろう」と疑問をもち、本時の主題について関心を高める姿。
- 展開場面において、「なぜ、命は自分だけのものではないのだろう」と、これまでの自分の生き方を基に考え、命のかけがえのなさを感じて「自分は〇〇を大切にして生きていきたい」と自分の生命を大切にしようとする意欲を高める姿。

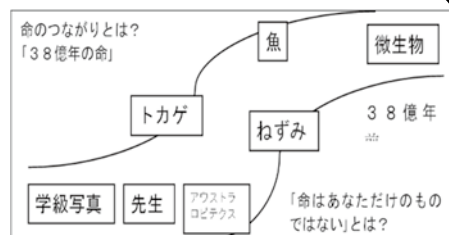
教材提示の工夫

- 導入場面で、生き物クイズを行います。微生物、魚、トカゲ、ねずみ、アウストラロピテクス、担任を順に提示しながら生き物の名前を考えるクイズを出題することで、本時の主題について徐々に関心を高めることができますようにします。その後、提示した生き物すべてに共通するものについて考えることで、「命」というキーワードを引き出し、微生物が38億年前に誕生したことを紹介することで、本時の主題についての関心を焦点化できるようにします。



板書の工夫

- 教材を読む前に、生き物クイズで使用した写真資料を歴史が古いものを右に、新しいものが左になるように板書に配置します。
- 展開場面で子どもに短冊を配り、自分の命につながっていると思うものを書いて黒板に貼るようにします。そうすることで、命が長い年月つながってきたことを捉えることができるようにします。



導入

○ 生き物クイズの答えを考える。

T：写真の生き物は何でしょう。

C：微生物。

C：シーラカンス。

発問：写真の生き物の共通点は何でしょう。

C：哺乳類。

C：命を与えられたもの。

【めあて】命のつながりとは何だろうか

展開

○ 「三十八億年の命」を読み、命について考える。

発問：みなさんとながっている命には何がありますか。その理由は何ですか。

C：お父さんやお母さん。産んでくれて、血がつながっているから。

C：おじいちゃんやおばあちゃん。お父さんやお母さんを産んだ人だから。

C：チンパンジー。人類の祖先だから。

○ 「命はあなただけのものではない」とはどういうことを考える。

発問：「命はあなただけのものではない」とはどういうことでしょうか。

C：一つでもなくなったら私たちはいない。

C：たくさんの命に支えられている。

C：命は自分だけのものではなく、みんなのおかげで生きている。

終末

○ つながりの中にある自分や他の人の命のかけがえのなさについて考える。

T：今日の授業で感じたことを書きましょう。

C：今まで命をつないでくれた祖先がいるから今があると思いました。

T：この教室でこの学級の全員が出会えたことは奇跡です。自分もまわりの人の命も大切にできたらすてきですね。

教材提示の工夫



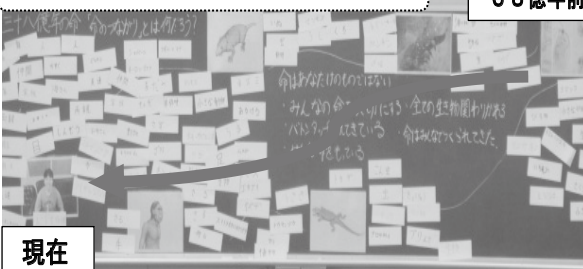
クイズ形式で生き物を提示することで、夢中になって考えることができます。

板書の工夫



生命のつながりが表れた板書

38億年前



子どもの考えを生かし、子どもと共に板書をつくることができます。

【これから実践する先生方へポイント】

教材提示と板書を一体化させる工夫を取り入れることで、教材の中に自分たちが入り込んでいるような感覚で教材の内容を捉えることができ、夢中になって考える子どもの姿を引き出すことができます。

また、板書した川が途切れてしまうと生命のつながりが途絶えてしまうことを可視化することで、自分たちの命もつながってきたことを捉え、学級の仲間や周りの人とのつながりも実感しやすくなります。

実践例③

主題名

誠実な生き方

中学1年生

A 自主自律、自由と責任

【教材名】 裏庭のできごと（出典：とびだそう未来へ 中学1年 教育出版）

【ねらい】 健二がどのような気持ちに背中を押され、職員室に向かったのかを考えることを通して、誠実に行動することのよさについて捉えられるようにし、何が正しく、何が誤りであるかを自ら判断して望ましい行動をとろうとする実践意欲と態度を育てる。

【教材の概要】

サッカーをしようと裏庭に行った健二、雄一、大輔の3人は、猫からひな鳥を助けるためにボールを投げ、窓ガラスを割ってしまった。



雄一が先生を呼んでいる間に、健二と大輔はサッカーを始め、窓ガラスをもう一枚割った。雄一が連れてきた先生に大輔は正直に言わなかった。



一枚はサッカーをして割ったことを正直に言うべきか悩んだ末に「僕、先生に言いに行こうと思うんだ」と健二は一人で職員室へと向かった。

【本時で引き出したい夢中になって考える生徒の姿】

- 3人の人物像を批判的に捉えるのではなく、自分にも同じような心の弱さや経験がないかを考えて共感的に捉え、自分自身と関わらせながら考えられる姿。
- 進んで自分の考えを伝えようとしたり、友達の考えに耳を傾けたりしながら話し合い活動に取り組み、よりよい考えを探そうとする姿。

発問の工夫

- 「なぜ健二は正直に言うことにしたのでしょうか」という発問ではなく、「どのような気持ちに背中を押され、職員室に向かったのか考えよう」という発問をすることで、登場人物の行動を支えた気持ちについて深く考えられるようにします。
- 「どのような気持ちに背中を押され、職員室に向かったのか考えよう」という発問によって、登場人物の気持ちに焦点化して考えられるようにして、次の話し合い活動において共通の気持ちに目を向けた生徒同士でグループを組むことができるようにします。



話し合いの工夫

- 話し合いの前に、机間指導する中で教師が子どもの考えを、「雄一に申し訳ないという他者への罪悪感」「誠実に行動しようという正義感」「もやもやを晴らしたいという気持ち」という3つのグループに分けます。その後、同じグループの中で、3～8人程度のまとまりを作って話し合い活動を行うようにします。
- 各グループに対して、活発な話し合いを生んだり、考えを深めたりできるようなトークテーマを提示した上で話し合い活動を行うことでグループごとに目的意識をもって、主体的に話し合うことができるようにします。

【トークテーマの例】

A 「雄一に申し訳ないという他者への罪悪感」と考えたグループに対して

「雄一が謝りに行かなければ、健二は職員室へ行かなかったのか」

導入

○ 教師の失敗談について話す。

T: 失敗や間違いをしたことのない人はいますか。

C: そんな人はいません。

C: 失敗だらけです。

【めあて】失敗や間違いをしたときに大切なことは何だろうか

展開

○ 「裏庭のできごと」を読んで、職員室に向かった健二の気持ちについて話し合う。

発問：健二はどのような気持ちに背中を押され、職員室に向かったのか考えよう。

C: ガラスを割ってしまって申し訳ない。

C: 雄一に申し訳ない。

C: 自分から逃げたくない。

C: もやもやを晴らしたい。

○ 机間指導で分類したグループに分かれ、健二の行動を支えた思いについて話し合う。

グルーピングの仕方

- A 雄一に申し訳ないという他者への罪悪感
- B 誠実に行動しようという正義感
- C もやもやを晴らしたいという気持ち

○ それぞれのグループで話し合ったことを全体の場で伝え合う。

C: 私たち A グループは話し合って、やっぱり自分がよくないと思ったから、正直に言ったのだという考えになりました。

終末

○ 自分の心の弱さが出てしまいそうなときにどんなことを大切にしたいか考える。

C: 悪いと思ったときにすぐ行動に移すことを大切にしたい。

C: 友人に左右されずに、自分が正しいと思ったことをしていきたい。

発問の工夫

グルーピングの進め方



「申し訳ない気持ちがあったと思う」とワークシートに記述した生徒



(机間指導しながら) 誰に対しての気持ち?

巻き込んでしまった雄一に。

あなたはAグループだね



ワークシートにA、B、Cを記入していき、グルーピングをします。

話合いの工夫

各グループでの話合いの様子の一部

トークテーマ

A 雄一が謝りに行かなければ、健二は職員室へ向かうことはなかったのか。

C: 雄一だけが理由じゃないかもしれない。

C: ごまかしている後ろめたさもあった。

C: 自分がよくないと思ったのかな。

トークテーマ

B 先生が来たときに、健二はなぜ正直に謝ることができなかったのか。

C: 正直に言うと、怒られると思ったから。

C: ばれなければいいと思った。

C: 迷っていたと思うよ。

トークテーマ

C 健二は何に対して「もやもや」していたのだろうか。

C: ごまかしている自分に。

C: 友達との関係にもかな。

C: 他にはあるかな。



【これから実践する先生方へポイント】

登場人物の心情に焦点化した発問をすることで、じっくりと考える子どもの姿を引き出すことができます。また、グルーピングは、あらかじめ出てくる考えを複数予想しておくことで、机間指導しながらワークシートを読み取れます。工夫した発問によって一人一人が考えたことを、さらに深められるようなトークテーマを提示することで、グループでの話合いが活発になり、夢中になって考える子どもの姿を引き出すことができます。

V テーマ研究部会のまとめ

1 成果と課題

本部会では「子どもが夢中になって考える道徳科の授業—7つの指導方法の工夫を組み合わせ—」をテーマに研究を進めてきました。その結果、次のような成果と課題が明らかになりました。

【○：成果】

- | | |
|----------|--|
| A | ○ ワークシートを工夫したことで、主人公の心情を自分との関わりで考えることができました。その後、動作化を行ったことで、主人公の心情に寄り添ったアドバイスを真剣に考える子どもの姿が見られました。 |
| B | ○ 教材提示と板書を一体化させたことで、教材への関心を高め、子どもから多様な考えを引き出すことができました。 |
| C | ○ 発問を工夫し、発問に対する自分の考えに合ったトークテーマについて、グループで話し合うようにしたことで、子ども全員が自分の考えをもち、活発に話し合うことができました。 |

【●：課題、→：改善点】

- 指導方法の工夫を組み合わせることで、意欲を高めたり、考えを広げたりすることはできましたが、活動の中で授業のねらいから外れた方向に関心をもってしまう子どもの姿が一部に見られました。
→ ねらいの方向で自分との関わりで考えることができるような声の掛け方や発問を事前に想定して、いくつかのパターンを準備しておくようにしていきます。
- 指導方法の工夫の組み合わせたことで成果もありましたが、実践する教材や学級によっては、主体性を引き出すことにつなげていない場面が見られました。
→ 子どもの実態と教材をしっかりと分析し、それぞれに応じた最適な指導方法の組み合わせ方を考えて授業づくりを行っていきたいと思います。

＜部員の声から＞

改めて基礎・基本の指導方法の工夫について学んだことで、普段の授業でも「この工夫を取り入れてみよう」と思うようになりました。



指導方法の工夫を組み合わせたことで、授業の中で真剣に考えたり、楽しんで話し合ったりする子どもの姿がたくさん見られました。

「この工夫を取り入れたら、子どもはどんな反応をするかな」と、自分自身がわくわくしながら授業をつくるのが、大切だなと感じました。



2 今後の方向性

本年度は、指導方法の工夫の効果や活用方法について改めて学習し、工夫を生かした実践を重ねた結果、夢中になって考える子どもの姿が数多く見られました。今後は、教材に合わせた工夫の組み合わせ方や生かし方について考えていくことで、子どもの主体性をさらに引き出し、夢中になって考える授業づくりを目指してまいります。

本年度のあゆみ

月	日	授業づくり研究部会	テーマ研究部会	合同学習会
5	7	研究部員総会		
5	15	道徳的価値や 子ども観について考えよう	指導方法の工夫の生かし方について考えよう	自己の生き方について 考えを深める工夫をした 道徳科の授業
6	5	自分との関わりで考えられる 発問を考えよう	指導方法の工夫を取り入れた 授業について考えよう	「正直、誠実」の 道徳科の授業
7	4	自分との関わりで考えられる 導入を考えよう	指導案について検討しよう	「相互理解、寛容」の 道徳科の授業
9	4	研究授業事前検討（模擬授業形式）		「規則の尊重」の 道徳科の授業
9	25	自分との関わりで考えられる 授業展開を考えよう	実践を振り返り、 成果と課題を見付けよう	「生命の尊さ」を 題材とした道徳科の授業
10	9	研究授業事前検討（リハーサル 戸田小にて）		
10	16	授業づくり研究部会 研究授業		
11	1	研究授業の振り返りをしよう	研究授業の振り返りをしよう	「節度、節制」の 道徳科の授業
12	11	研究発表会に向けて プレゼンを考えよう	研究発表会に向けて プレゼンを考えよう	「礼儀」の道徳科の授業
1	10	研究発表会に向けて プレゼンを完成させよう	研究発表会に向けて プレゼンを完成させよう	「勤労、公共の精神」の 道徳科の授業
1	22	研究発表会のリハーサル		
1	29	研究発表会		
2	14	今年度の実践を振り返ろう	今年度の実践を振り返ろう	

※ 1月以降については、予定が掲載されています。

あ と が き

本会報を手にとっていただき、ありがとうございました。掲載した実践はいかがでしたでしょうか。

今年度は、「夢に向かって自分らしく生きる子どもたちの育成」を目指し、「授業づくり研究部会」「テーマ研究部会」を運営してきました。また、両部会が集まって行われる「合同学習会」でも、子どもたちが自分らしく主体的に学ぶための授業づくりのアイデアが紹介されました。月1回の研究会では、毎回、実践を持ち寄り、白熱した議論が繰り広げられています。私たちが目指す、「道徳の授業」の一角が研究会で実践されています。研究会の熱量が、この会報を通して皆さんに伝わることを願っています。また、令和7年度から始まる「キャリアタイム」では、「基礎的・汎用的能力」の一つとして、自分と向き合う「自己理解力」や自分の考えを伝える「人間関係形成力」の育成が求められています。これらの力を育むためには、「道徳」が一翼を担っています。キャリア教育の観点からも「道徳」の実践は、ますます重要なポジションとなってきます。

本会報を読んで、名古屋市道徳研究会の活動に、興味をもっていただけた方がいらっしゃいましたら、ぜひご連絡ください。

最後になりましたが、本研究会に対しまして、格別のご指導、ご支援を賜りました先生方、並びに各関係機関の皆様に、心より感謝申し上げます。また、本会報を発刊するにあたり、実践並びに執筆にご尽力いただいた先生方に敬意を表するとともに、厚く御礼申し上げます。

名古屋市道徳研究会委員長

名古屋市立上野小学校 伊藤 みずき

会報作成協力者

【授業づくり研究部会】

部 長 土屋 俊貴（八社小）
副部長 水谷 祐基（柴田小）
部 員 大島 佑太（東白壁小）
畠山 靖弘（平田小）
江原 帝斗（八社小）
伊橋 諒（白山中）
脇田 健太郎（吹上小）
倉屋 玲樹（旗屋小）
静谷 公希（戸田小）
吉川 慶（戸田小）
青山 拓也（万場小）
大江 伸俊（東港中）
新田 裕樹（白水小）
峯 紗矢香（太子小）
増村 基（旭出小）
近藤 さき（大高中）
舘 勇佑（上社小）
廣野 良明（大坪小）

【テーマ研究部会】

部 長 勘角 亮（新栄小）
副部長 森本 和良（なごや小）
部 員 豊田 昇平（春岡小）
田中 清彦（上野小）
藤井 真帆（富士見台小）
三澤 裕紀（稲葉地小）
石原 聖也（新栄小）
池内 秀幸（川原小分校）
柳田 一帆（堀田小）
岡田 夏実（愛知小）
真田 幹弘（高木小）
石坂 直也（当知小）
小島 早織（柴田小）
三宅 祐介（南特別支援学校分校）
岩嶋 敏也（守山小）
宮原 宝（苗代小）
江口 観世（守山西中）
荒木 夕賀（守山西中）
久野 嘉子（平針南小）